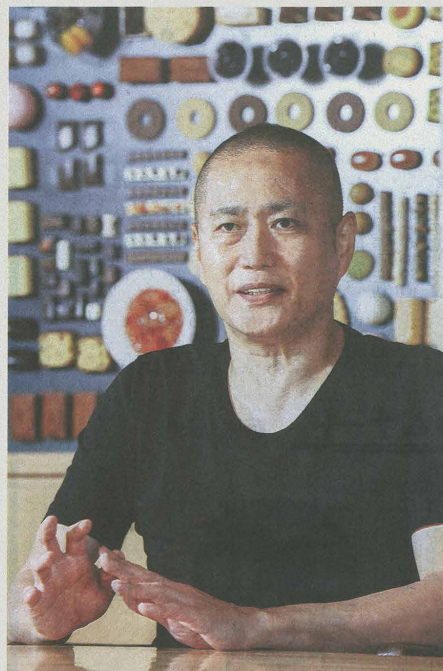


山本 昌仁さん たねやグループCEO



やまもと・まさひと 1969年滋賀県近江八幡市生まれ。高校卒業後、製菓学校や職人の下で修業、全国菓子大博覧会で最高賞を最年少で受賞。2011年10代目当主・たねや4代目を承継。13年から現職。滋賀経済同友会代表幹事も務めた。

■和洋菓子を展開するたねやグループ(滋賀県近江八幡市)は近江の原風景を再現する旗艦店「ラ コリーナ近江八幡」や包装の簡素化、ヨシ原保全など、SDGs(持続可能な開発目標)の先進的な取り組みで知られる。山本昌仁・最高経営責任者(CEO、53)が主導してきた。

SDGsは無駄を省き、質素節約を大事にする近江商人の精神そのものだ。誰一人取り残さない社会とは「売り手よし、買い手よし、世間よし」と同じでしょう。世界的な気候変動は地球が怒っているように思える。私たちは地球のためというか、次世代の子どものために行動を変えなければならぬ。

新型コロナウイルス禍で子どもたちは2年半もマスクをさせられている。人の命は大切だが、ウイルスの性質も変わっている。もっと社会や経済を動かしていかななくては。「ラ コリーナ」は「自然に学べ」をテーマにしていて、子どもたちに田植えを手伝ってもらおうと再開した。

持続可能な企業経営には人材育成や社員の待遇向上も必要だ。物価が上昇するなかで給料を上げて生活水準を高めないと、世の中も回っていかない。滋賀に進出してくる外資系企業と賃金格差が大きくならないようにして、いい人材を集める。頑張った分が報われるようにする。

包装の無駄を省いて利益を上げれば、社員への投資にも回せる。お菓子は贈答品に使われるので、かつては簡素化するとお客様に怒られたものだ。それがSDGsが広がる

# SDGs、近江商人に通ず



とともに、褒められるようになった。この流れを利用しようと思う。理想のパッケージはミカンの皮だ。見ただけで中身の状態が分かり、中身を守り、土に戻る。

■大津市の琵琶湖畔への出店など大型投資を再開する。経営者として新型コロナウイルス禍に考えることは多かった。

分別みで入っていたスケジュールがなくなり、立ち止まって考えるいい機会になった。様々な専門家や各地の首長さんらと話をし、必要なものこそでないものの整理ができた。コロナで厳しい時期に業績を支えたのは地元のお店と通販だった。大津への再出店もそんな中でいただいたお話だ。念願だった琵琶湖畔に出すときは地域うしき

## 関西は地域の個性発掘を

を大事に考えている。大津では琵琶湖の新しい見せ方に挑戦する。古文書などで昔からある樹種を調べて、大津らしい森をつつって湖の四季が感じられる店にしたい。「ラ コリーナ」とは全く別ものになる。どのようにつぎをいさつくり出すのか、ちょっとワクワクしている。

■25年国際博覧会(大阪・関西万博)への期待は大きい。万博には世界から多くの人が集まる。そこから関西各地に足を延ばして、もろもろには地域の個性を磨くことだ。京都の宿が高いから滋賀に泊まるのではなく、琵琶湖をほじめとする自然や歴史に触れるために人が来るように。見学できる新工場を建設中の「ラ コリーナ」や大津の琵琶湖畔にわざわざ来てもらって、お菓子を食べてほしい。

よく関西はバラバラだと批判されるが、私はそれぞれが大事だと思う。東京周辺はこれも東京化している。滋賀には滋賀、大阪には大阪の良さがある。関西ではクワ、お茶、ミカンなどのいい食材がある。それぞれの風土や歴史が生み出している。夢の夢としていつか、それぞれの産地にその食材に特化した店をひらきたいと思う。

関西のそれぞれの地域を持つ個性は捨てたもんじゃない。これからは「京都の○○」「和歌山の○○」のエリアがもっと身近なエリアがブランド化していけばいい。地域の暮らしの中に根差した店があり、それを掘り起せばいい。たねやはそれを菓子でやっています。



2015年には旗艦店「ラ コリーナ近江八幡」をオープンした(滋賀県近江八幡市)

(聞き手は木下修臣)